校長室通信

令和７年５月12日号

志免町立志免西小学校
髙良　祐治

４月末の本年度最初の学習参観には、多くの保護者の皆様に来校いただき、新しい学年で学習に取り組むお子様の様子や学級の様子をご覧いただきました。また、この日に行われた保護者ボランティアと６年生による運動場整備には、多くの保護者の皆様に参加していただきました。

５月に入り、毎年多くの保護者や地域の方に観覧していただく運動会に向けた練習が行われており、子どもたちの元気な声が響いています。気候も、さわやかな風が窓を開けた教室の中を通り抜け、学習にも一番適した季節となっています。

このように、家庭や地域に学校を開き、学校、家庭、地域という三者で子どもたちを育むコミュニティスクールを推進していこうとしているときに、東京立川市で小学校が不審者に襲撃を受けるというショッキングな事件が起きました。子どもたちの安全･安心を守ることと家庭や地域と共に学校教育を推進していくことの両立の難しさを感じています。

理想と現実

私はタイのバンコク日本人学校に勤めていたことがあります。そこは、最上部に鉄条網が張り巡らされた高さ2mを越える塀に囲まれ、校門には学校に雇われた警察官が拳銃を携えて立っていました。修学旅行は、白バイとパトカーが、バスの前後に付き、信号はすべて青に切り替えてノンストップで移動します。外国ですし、“治安のいい”日本と同じ感覚は通用しないことは分かっていましたが、こんなことにピリピリしなくても安心して過ごせる日本の学校のよさを実感したものです。

ところが、先日の事件は、「そんなことはない」を前提に行っていた学校教育を、「起こりえる」を前提とした学校教育に変えざるを得なくしてしまいました。

ここで考えなくてはいけないのが、「小学校」という公教育施設の特殊性です。今回の事件で、多くのマスコミは「鍵のかかっていない門から侵入」「カメラ付きインターホンを設置し、来校者の氏名や目的を確認し、その都度解錠すべき」と報道しました。

確かに理想はそうかもしれません。しかし、本校を例にすると、門は３カ所あります。遅刻してくる児童は毎日30名前後います。忘れ物を届けに来てくださる保護者や早退の児童のお迎え、学用品等の出入り業者も多数います。ひっきりなしの訪問のたびに校門を解錠したり施錠したりする対応を教職員が行うことは現実的ではありませんし、全国に18500校以上ある公立小学校に警備員を配置することも難しいと思います。そもそも、本気で襲撃しようと思えば、フェンスを乗り越えたり、１階の窓ガラスを割ったりするなど、どこからでも侵入できます。厳重に守られた学校にしようと思えば、施設の改修や人員の確保が必要となり、財源など新たな課題が生じます。

今、私たちができることは

子どもたちの中には、様々な理由でなかなか学校に行くことができず、遅れてでも何とか登校している子どももいます。そんな子どもにとっては、校門をくぐる、昇降口で上靴に履き替える、授業中の教室に入るといった当たり前のことも、勇気が必要です。そんな“なんとか”登校しようとしている子どもたちの姿を応援したいと思います。

保護者の中には、「子どもが学校でうまくやっているだろうか」と心配な方もいるかもしれません。学校としては、いつでも学級の様子を見ていただきたいと思っています。

地域の方からは、「学校のために役に立ちたい」という声を多くいただいています。もっと学校に関わっていただきたいと思っています。

こんな三者で育むすてきな学校を実現していくために、現状の中でできることは、来訪者への積極的な声かけやあいさつ、来校の際には、入校許可証を身に付けていただく、確実に門扉を閉めていただくなど、これまでも取り組んできたことや基本的なルールを徹底していくことしかないのではないかと思います。

「性善説に頼る時代ではない」のかもしれませんが、子どもがのびのびと育つ日本の学校のよさを守っていきたいと改めて思っています。